スペイン宮廷のヴェサリウス

泉　彪之助

日本医史学雑誌第五十巻第四号　平成十六年九月　十四日受付
平成十六年十二月二十日発行　平成十六年十月二十二日受理

〔要旨〕アンドレアス・ヴェサリウスは、『ファブリカ』の出版後、スペイン宮廷に入り、神聖ローマ皇帝カール五世、スペイン王フェリペ二世に侍医として仕えた。著者は、その経緯について検討した。ヴェサリウスの先祖は、ハプスブルク家およびブルゴーニュ公家と関係が深く、その侍医あるいは宮廷薬剤師であった。ヴェサリウスはブリュッセルに生まれ、パドヴァ大学で学位を得、同大学の解剖学、外科学の教授に就任し、『解剖学図譜』、『ファブリカ』を出版した。スペイン宮廷におけるヴェサリウスの業績として、フランス王アンリ二世とスペイン皇太子ドン・カルロスの治療に参加したことが有名である。カール五世は退任の年、ヴェサリウスに宮中伯の称号を授与した。

キーワード――ヴェサリウス、スペイン宮廷、ハプスブルク

アンドレアス・ヴェサリウスは、『ファブリカ』（De humani corporis fabrica libri septem）の出版後、スペイン宮廷に入り、神聖ローマ皇帝カール五世（スペイン王カルロス一世を兼ねる。以下カール五世。また以下の皇帝は、とくに断らない限り神聖ローマ皇帝を指す）とその嗣子スペイン王フェリペ二世に侍医として仕えた。

著者は、この経緯について検討した。一つの理由は、解剖学に革新的業績を挙げたヴェサリウスが、なぜ保守性の強いスペインに迎えられたかということであった。調査を進めるにつれて、ヴェサリウスの家が代々ハプスブルク家と関係が深かったこと、またヴェサリウスが生まれたブリュッセルはいわゆる低地諸国の重要な土地で、それがヴェサリウスの生涯に影響していることも知った。

ヴェサリウスの家系についてヴェサリウス自身が「シナ根の書簡」（Radicis Chinae usus）で記載しているが、引用された一部しか見ることができなかったので、この調査では基本史料として「ヴェサリウス宮中伯認可状」[1]（以下宮中伯認可状）、『ファブリカ第一巻』英訳[2]、「父アンドリエスの嫡出承認書」[3]を使用し、文献としてはバロン[4]、オマリー[5]、坂井建雄[6][7]、小川政修[8]、小川鼎三[9]-[12]等の著書と一般史の文献を用いた。

この調査は、ヴェサリウスについて主に一般史の立場から検討したもので、一つの試論に過ぎないことを断りたい。

一、ヴェサリウスの家系（表1）

アンドレアス・ヴェサリウスは、一五一四年十二月三十一日、ブリュッセルで生まれた[4]（写真1）。父は、皇帝マクシミリアン一世とカール五世の宮廷薬剤師アンドリエス、母はイサベル、旧姓クラッペ（Isabel Crabbe）（注一）であった[4]（注二）。

ヴェサリウスの家系はハプスブルク家と関係が深く、その始まりは五代前にさかのぼる。ヴェサリウスの家は、代々医師の家柄で、高祖父（曾祖父の父）ペーテルは、ハプスブル

写真 1　ブリュッセルにあるヴェサリウスの銅像（ブリュッセル、バリカード広場）

表 1　ヴェサリウスの家系

ペーテル・ファン・ヴェセーレ
皇帝フリードリヒ三世の侍医
|
ヨハネス（またはヨハン）・ファン・ヴェセーレ
ルーヴァン大学教授、マクシミリアン、シャルル突進公と娘マリーの侍医

- エヴェラルト・ファン・ヴェセーレ
  オーストリア大公（後の皇帝）マクシミリアン、
  妻マリー、子のフィリップとマルガレーテの侍医
  |
  アンドリエス・ファン・ヴェセーレ＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝イサベル（旧姓：クラッベ）
  （エヴェラルトの庶子、後にカール五世により実子と認定）
  マクシミリアン一世、マルガレーテとカール五世の宮廷薬剤師
  - ニコラス
  - アンドレアス・ヴェサリウス
    1514 出生、1537 医学士、
    カール五世侍医、1556 宮中伯
    フェリペ二世侍医、1564 死去
    |
    アンネ
    フェリペ二世の鷹匠頭と結婚
  - フランシスクス
    フェラーラで弁護士
    後、ウイーン大学医学部教授
  - アンネ
    カール五世の理髪師と結婚
- ヨハンナ
- パウル
- エンリケ
  （ヘンドリック？）

文献（3）掲載の表を改変して作成。ヴェサリウス家の人名は推定実名で記載。アンダーラインした名はスペイン語表記のまま

ク家出身の皇帝フリードリヒ三世の侍医、[4]曾祖父ヨハネス（またはヨハン）（注三）は、ブルゴーニュ公国シャルル突進公と娘マリーの侍医であった。[1][4][6]後に述べるように、ブルゴーニュ公国はハプスブルク家と密接な関係にあった。

ヴェサリウスの家は、もともとドイツのライン下流の町、ヴェーゼル（Wesel）出身とされる。[4][5]ヴェサリウスの時代、ヴェーゼルはクレーフェ（Cleve）公領に属していた。[5]クレーフェ公領は神聖ローマ帝国の版図内だが、低地諸国に境界を接した土地である（注四）。[13]ヴェサリウスの一家がいつブリュッセルへ来たのか、明らかでない。低地諸国と関係が深かったマクシミリアンと異なり、フリードリヒ三世は主にオーストリアに住んだので、[14]ペーテルがどのような経緯でフリードリヒ三世の侍医になったのか明らかにできなかった。ペーテルは、アビセンナに関する論文を書いている。[4]

バロンは、ヴェサリウスの曾祖父ヨハネスを「皇帝マクシミリアンの侍医、一四二九年から一四四六年までルーヴァン大学教授、後にブリュッセル市医」としている。[4]しかし宮中伯認可状ではブルゴーニュ公国シャルル突進公の侍医と、[1]「シナ根の書簡」では突進公の娘マリーの侍医となっている。[15]ルーヴァン大学は、シャルル突進公の父フィリップ善良公が一四二六年に開設した大学で、[16]ヨハネスがこの大学の教授（医学の教授で、数学も教えていた）[4][5]と公国宮廷の侍医を勤めたのは自然であろう。しかしヨハネスは、ブルゴーニュ公国滅亡（一四七七年）とマリーとマクシミリアンとの結婚（一四七七年）一年前の一四七六年に死去しているので、[5]他の廷臣の例に見られるような、公国侍医からオーストリア大公侍医となったのではなく、父の後を継いでハプスブルク家の侍医となっていたのが、ブルゴーニュ公家の侍医となったのであろう。オマリーは、ヨハネスがマリーの侍医であったことを疑っているが、[5]宮中伯認可状や「シナ根の書簡」に現れたヴェサリウスの記憶を疑う理由はない。ちなみにマクシミリアンがマリーと結婚したとき、マリーがウイーンへ行ったのではなく、マクシミリアンが低地諸国に来ている。[14]ヨハネスが死去した一四七六年はマクシミリアンの皇帝就任（マクシミリアンは慣習となっていたローマにおける皇帝戴冠を行わなかったので、年を決定しにくい。[14]一般にはフリードリヒ三世が死去し、マクシミリアンがドイツ王となった一四九三年を就任の年とする。[17][18]マクシミリアン自身の皇帝宣言は一五〇八年）[14]前

であり、皇帝の侍医というのは誤りである。ヨハネスは、数学と天文学の著書も執筆している。[4]

ヴェサリウスの祖父エヴェラルトは、父ヨハネスの職をついでマクシミリアンの侍医になり、[4][5]マクシミリアンとその妻マリー、さらにその子供たち、フィリップ、マルガレーテの侍医も勤めた。エヴェラルトは、マクシミリアン一家の家庭医のような立場にあったようである。ヴェサリウス自身は、「エヴェラルトは長くマルガレーテの侍医であった」とするが、オマリーのいうように、一四八五年に死去したエヴェラルトが、長い間、一四八〇年生まれのマルガレーテの侍医であったとするのは不自然である。[5]エヴェラルトが死去した一四八五年はマクシミリアンの皇帝就任前であり、エヴェラルトはマクシミリアンのオーストリア大公時代の侍医ではあったが、皇帝侍医ではなかった。エヴェラルトは、ラーゼス、ヒポクラテスについての著書もあり、騎士（注五）に叙された。[5]

父アンドリエスは、エヴェラルトの庶子だが、一五三一年にカール五世により嫡出と認められた。[3]前述のように、アンドリエスはマクシミリアンとその孫カール五世の宮廷薬剤師であった。バロンは、ヴェサリウスが生まれたとき、アンドリエスはマルガレーテの薬剤師であったとする。[4]

このようなヴェサリウスとハプスブルク家との関係は、ヴェサリウスの姉妹や娘にもおよび、妹アンネはカール五世の理髪師と、同じ名の娘アンネはフェリペ二世の鷹匠頭と結婚している。[4]

ヴェサリウスの「シナ根の書簡」にコジモ・ディ・メヂチ（後述）への献辞を書いている弟フランシスクスは、イタリアのフェラーラで弁護士を開業していたが、後に医学を学び、ウイーン大学医学部教授になった。[4]

ヴェサリウスの父は一五四三年に、母は一五五三年に死去した。[4]

二、神聖ローマ帝国とハプスブルク家

先に述べたように、ヴェサリウスの先祖とハプスブルク家との関係は、ヴェサリウスの高祖父ペーテルがハプスブル

ク家出身の皇帝フリードリヒ三世の侍医となったことに始まる。

神聖ローマ帝国の性格や内容について、最近多くの議論がある。[19] その詳細は専門書に譲り、ここではいわゆるハプスブルク帝国の理解に必要なことを述べる。

慣習を追認する形で発布された金印勅書（一二四六年）によって帝国の法的性格が確定した。この勅書によって、皇帝は、聖界、非聖界の有力貴族、七人の選帝侯によって選出されることが規定された。しかしフリードリヒ三世の従兄弟でその前任者であったアルプレヒト二世が皇帝に選出されて以後、この制度は形式的に残されたまま、ハプスブルク家が皇帝位を代々世襲し、いわゆるハプスブルク帝国が成立する。[19][20]

ハプスブルク家は、もともとスイスの小領主であった。一度ルドルフが皇帝に選出されたが（ルドルフ一世）、ルドルフの死後は皇帝位は再び他の家系に移った。ハプスブルク家が皇帝位を独占するようになったのは、一年ほどで死去したアルプレヒト二世の後、フリードリヒ三世が神聖ローマ皇帝に選ばれてからで、フリードリヒ三世の子がマクシミリアンである。[19] もっともこのころの皇帝の権力は弱く、諸侯や都市の意向に左右され、権力がある程度確立したのはカール五世以後であった。

三、ネーデルラント・フランドル・ブルゴーニュ公国

この論文の参考文献に、ネーデルラント（Nederland）あるいはフランドル（Frandre）という地名がしばしば現れる。ヴェサリウスは、ブリュッセルで生まれ、ルーヴァン大学で学んだ青年時代までをブリュッセルとその近郊で過ごした。カール五世の侍医になってからも主にブリュッセルに住み、スペインで過ごしたのは晩年の五年間だけだったようである。[4]

ヴェサリウスが生まれたブリュッセルのあたり、すなわちほぼ現在のベルギー・オランダの領域は、ブラバント公領、

フランドル伯領などの小領邦の集まりであった。いわゆる低地諸国である。[13] 低地を、土地のゲルマン系言語で呼ぶとネーデルラントになる。現在、オランダ語のNederlandはオランダ王国を指すが、オランダが独立したのは十六世紀の終わりで、独立が国際的に承認されたのは十七世紀にはいってからであった。この論文が扱う時代には、まだオランダという国は存在しなかった。ここでいうネーデルラントは、地域名である。その東半分は神聖ローマ帝国が宗主権を有し、西半分はフランス王国が宗主権を持っていたが、毛織物の生産と貿易によって得たこの地方の経済力と市民の発言権は強く、領主の権力も宗主権も強力なものではなかった。[13]

現在、オランダを意味する英語のNetherlands, フランス語のPays Basがいずれも複数形なのは、この低地諸国から来ているからである。オランダという国名はHollandから来ているが、広く知られているようにHollandは国名でなく、アムステルダムなどを含む有力州の名である。ヴェサリウスの時代には、ホラント伯領という名があった。[13]

カール五世の時代になると、フランドルという地名がよく現れる。[21] フランドルはフランス語で、定義の仕方によってその範囲は異なるが、ここではネーデルラントの南西寄りの地域を指す。現在のオランダの特に北寄りの地域は、北部ネーデルラントと呼ばれ、フランドルには含まれなかったようである。

割拠していた低地諸国全体を支配下に置き、この地方を政治的に統一しようとしたのが、(ヴァロア朝)ブルゴーニュ公国である。[16][22] ブルゴーニュは本来フランス中部の一地域で、かってその西半分はブルゴーニュ公領、東半分はブルゴーニュ伯領でブルグンドと呼ばれ、ブルグントは神聖ローマ帝国領であった。[22] ブルグンドも後にフランス領となり、現在に至っている。

十四世紀なかば、フランス王ジャン二世の末子フィリップは、王からブルゴーニュ公領を与えられ、大公の称号を受けた。[16][22] これが（ヴァロア朝）ブルゴーニュ公国初代の大公フィリップ豪勇公である。フィリップはフランドル伯領の継承者マルグリートと結婚し、これによってフランドル伯領の支配権を得た。[16][22]

ブルゴーニュ公国の四代の領主は、フィリップ豪勇公、ジャン無畏公、フィリップ善良公、シャルル突進公である。これらの大公は、婚姻や武力によって周囲の小領邦を支配下に置き、この地方をある程度統一することに成功した。[16] このブルゴーニュ公国支配下で文化が栄え、ホイジンガの名著『中世の秋』[23]は、このブルゴーニュ公国を舞台にしている。またフランス王室から分かれたといっても、ブルゴーニュ公国は神聖ローマ帝国とフランス王国との間にあって一種の独立国としての性格を示し、フランス王国にしばしば干渉し、それと対立する存在となった。

ブルゴーニュ公国は、本来のブルゴーニュ地方と共にネーデルラントを重視し、フィリップ善良公はブリュッセルを首都とした。[14][16] ブルゴーニュ公国最後の支配権者マリーは、ブリュッセルで生まれている。[24] この地方におけるブルゴーニュ公国の最盛期の版図は、低地諸国全体に近い。

ブルゴーニュ公国は、本来のブルゴーニュ地方とネーデルラントとが飛び地になって離れており、これを連結するのが公国の悲願であった。シャルル突進公は、この悲願を達成すると共に領域を広げようとし、軍事行動に出たが、これに対抗したロレーヌ・アルサス・スイス連合軍とナンシーで戦って敗れ、戦死した。[14][16][22] 突進公の死によってブルゴーニュ公国は勢力が衰え、フランス王など、権力の空白を狙った諸国から侵略を受け、多くの領地を失った。大公の一人娘マリーは、公国の権益を維持するため、以前から関係の深かったハプスブルク家と結び、フリードリヒ三世の息子マクシミリアンと結婚した。[14] これによってハプスブルク家は、旧ブルゴーニュ公国領ネーデルラントの支配権を得たのである。マリーは、一四八二年、結婚後五年で狩猟時の事故によって死去し、一四九三年に夫マクシミリアンが神聖ローマ皇帝となるのを見られずに終わるが、[14][16][22] 息子フィリップ、娘マルガレーテらの子を残した。このフィリップが後にフィリップ美公と呼ばれ、カール五世の父である。

四、ハプスブルク家とスペイン王家（表2）

単純な関係ではないが、ハプスブルク家とブルゴーニュ公家、ハプスブルク家とスペイン王家は、フランス、スイスとの対立関係をめぐって早くから協力していた。スイスは、かってオーストリアの支配下にあり、それと離れて独立を得るため、フランスと結んだのである。一方、スペインは強力になりつつある隣国フランスに対抗するため、オーストリアと結んだ。

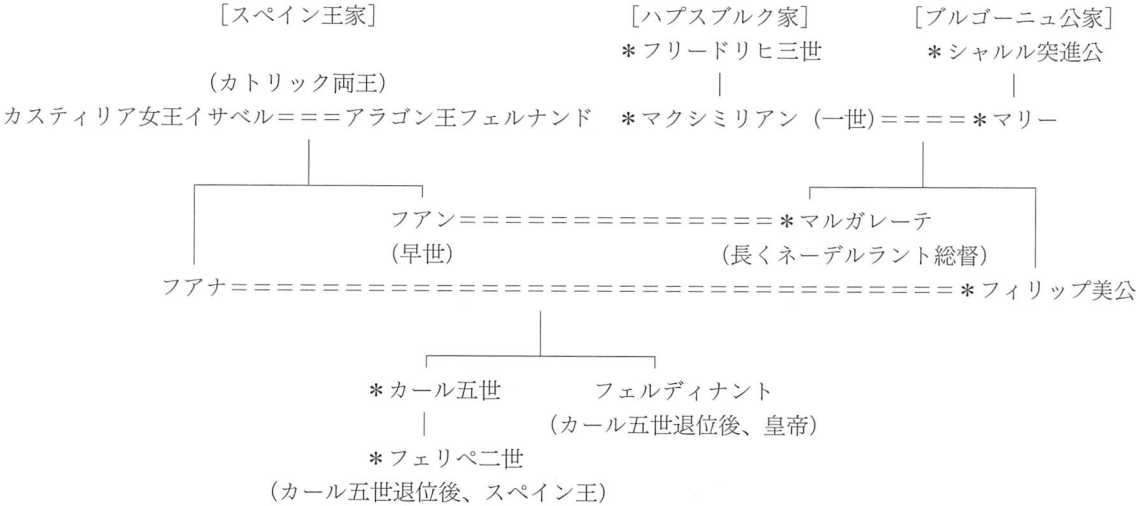
皇帝マクシミリアン一世は、ブルゴーニュのマリーの遺児マルガレーテをスペイン皇太子フアンと結婚させ、また同じく遺児フィリップ美公をスペイン王女フアナと結婚させた。[14] いわゆる二重結婚で、マルガレーテはフィリップ美公の妹である。しかしフアンは病弱で早く死去し、その他のスペイン王子も早世して男系の継承者がいなくなったため、スペイン王位（この時点ではカスティリア王位）の継承権はフアナに移った。[14][21] オーストリア、ブルゴーニュ、スペインの三国のうち、スペインだけが女性の王位就任を認めていたからである。フアナはフィリップ美公に熱烈な愛を注いだが、両親のカトリック両王が亡くなった後も、スペイン王位の継承権は離さなかった。[25]

フィリップ美公とフアナの子、カールが皇帝とスペイン王を兼ねたのは、フィリップ美公が早世し、フアナは狂女王フアナ（Juana la Loca）の名のように精神疾患にかかり、幽閉されたためである。[14][25][26] フアナは形式上はスペイン王位にあったが、実質上はカールがスペイン王カルロス一世として統治を行い、またカールは祖父マクシミリアン一世からは皇帝の地位を受け継いで皇帝カール五世となった。[21]

カール五世は一五〇〇年、フランドル地方のゲント（ガン）に生まれ、父フィリップ美公の死後、叔母マルガレーテに養育された。[21] 先に述べたようにマルガレーテはスペイン皇太子フアンと結婚したが、夫がまもなく死去し、再婚した相手も死去したので、父マクシミリアンがネーデルラント総督に任命したものである。[14] マルガレーテはブリュッセルに近

表 2　神聖ローマ皇帝カール五世（スペイン王カルロス一世を兼ねる）の系譜

（主要人物のみ記載）



＊印は、ヴェサリウスの先祖とヴェサリウス自身が、医師あるいは薬剤師として仕えた君主
カール五世は、皇帝・スペイン王の他に、フランドル伯など低地諸国について 17 の称号を持つ

いメヘレンに質素な宮殿をかまえ、二十数年間善政を敷いた。また卓越した政治力によって父マクシミリアンを助け、カール五世の皇帝選出にも働いた。[21]

カール五世は、皇帝、スペイン王としての称号の他に、フランドル伯、エノー伯など、祖母マリーから父フィリップ美公を経て受け継いだネーデルラントの各領主の称号十七個も有した。[13] 江村は、カール五世がブルゴーニュ公と呼ばれたとしている。[21] フランドルにおけるカール五世の宮殿は、ブリュッセルにあった。[13][21] これらのことは、『ファブリカ』扉絵の文章の意味を考えるときに関係する。

カール五世はフランス語を母語として暮らし、そのためスペイン王になったとき、スペイン語を話せなかった。一五一七年、初めてスペイン入りしたとき、スペイン宮廷へフランドル宮廷の廷臣を大勢連れていって摩擦を起こした。[21] 連れて行かれた廷臣の一人が、ヴェサリウスの父、宮廷薬剤師アンドリエスであった。[4]

五、『ファブリカ』の出版とカール五世

ヴェサリウスの生まれたブリュッセルは、もとはブラバント公領で、後にブルゴーニュ公国の首都となった都市である。バロンはブリュッセルがブラバント公領でフランドル伯領でないことを強調しているが、[4] ブリュッセルは広義のフランドル地方に属する。ヴェサリウスが生まれた一五一四年には、ブルゴーニュ公国最後の支配権者マリーとその後継者フィリップ美公はすでに死去しており、支配を受け継いだハプスブルク家の当主、皇帝マクシミリアン一世に代わって、ネーデルラント総督マルガレーテが統治していた時期であった。五年後の一五一九年、マクシミリアンは死去し、[14] カールが支配権を継承する。カール五世が引退してフェリペ二世にフランドルの支配権を譲ったのは、一五五五年である。[21] 一五一四年に生まれ、一五六四年に死去したヴェサリウスは、その生涯の主要部分をカール五世の支配下で送ったことになる。

ヴェサリウスは成人後、ルーヴァン大学、パリ大学に学んだが、パリ大学の教育に満足できず、イタリアのパドヴァ大学に学び、一五三七年に学位を得た。学位取得後、ただちに同大学の外科および解剖学の教授に就任した。[4][5] 一五三八年、ヴェサリウスは『解剖学図譜』(Tabulae anatomicae sex) を出版した。このとき、カール五世はフランス王、教皇との三者会談に臨むためフランスのニースにいたが、[21] 供奉していたヴェサリウスの父アンドリエスは、『解剖学図譜』をカール五世に献上し、これからカール五世はヴェサリウスのことを知った。[4] 『解剖学図譜』はカール五世の侍医 Narciso Partenopeo に捧げられているが、[4] カール五世は、自分宛でないこの書を快く受け取ったという。『ファブリカ』の序文では、「父アンドリエスが、『解剖学図譜』をカール五世の高覧に供した」となっている。[27]

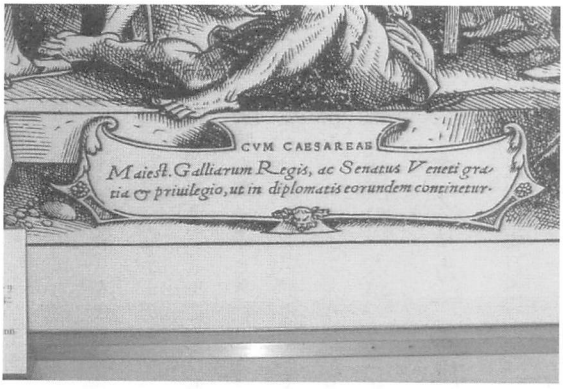


写真 2　『ファブリカ』扉絵下端の文章
医の博物館（新潟）の拡大展示より撮影

ヴェサリウスは、一五四三年、『ファブリカ』を出版する。『ファブリカ』には、本文の他に序文[27]と「(出版者、バーゼルの) オポリヌスへの手紙」[28] が掲載されており、序文はカール五世への献辞である。序文の前の方には、解剖学研究の意味、解剖学が軽視されて来たことへの批判などが書かれているが、後の方には「もしこの書物が問題を起こしたら、庇護をお願いする」という文言がある。著者（泉）はかって、これがヴェサリウスがスペイン宮廷にはいった理由でないかと想像した。すなわちヴェサリウスは、『ファブリカ』の出版によってガレノス解剖学を批判することになり、非難されたことから、それから離れることが必要だったのではないかと考えたのである。しかしヴェサリウスに対する非難は、スペイン宮廷に入る前よりも後の方がむしろ盛んであり、現在では、後に述べるようにヴェサリウスは

父アンドリエスの地位を継いだのではないかと考えるようになった。

『ファブリカ』扉絵の下端にはラテン語の文章があり（**写真2**）、「皇帝にしてガリアの王たる陛下、ならびにヴェネツィア元老院の、恩恵と、これらの方々の特許状によって規定される特権により」（注六）と書かれている。これは海賊版の横行を予防するためのものというが、カール五世への献辞である序文と共に、『ファブリカ』の出版それ自身がカール五世の影響下にあったことを示している。ここでヴェネツィア元老院という名前が出てくるのは、当時、パドヴァ大学がヴェネツィア元老院の支配下にあったからである。このときヴェサリウスは、カール五世とヴェネツィア元老院と両方から特許状を受けており、カール五世からのはブリュッセルにおいてあったので、母親から送ってもらった[27]。

当時、南イタリアはカール五世の支配下にあり、北イタリアのヴェネツイアもカール五世の権力の影響を受けていたが、一応別の国であった。カール五世とヴェネツイア元老院が併記されているのは、そのためである。

六、カール五世の侍医として

ガリソンは、ヴェサリウスのスペイン宮廷時代を「長い退屈な年月（long, tedious years）」と書いている[11]。しかし実際には、ヴェサリウスほどの人がそうした無駄な時間を費やす筈はなく、スペイン宮廷においてヴェサリウスは臨床家として誠実につくし、いくつかの業績を上げた。

ヴェサリウスがスペイン宮廷の侍医となった時期について、一五四三年[5][6]、一五四四年[10]、一五四六年[8][9]の諸説がある。また正式に任命される前に、カール五世の軍に従軍したとの記載もある[8]。

坂井建雄[6]、オマリー[5]によれば、ヴェサリウスは、一五四三年八月、クレーフェ公領への侵攻（注七）を前にしたカール五世に拝謁し、『ファブリカ』と『エピトメー』（Epitome）を献上し、侍医に任命された。

パドヴァ大学を離れた後、ヴェサリウスはボロニア、ピサで講義や解剖示説を行い、またフィレンツエの支配者コジ

モ・ディ・メディチ（メディチ家初代のコジモ、いわゆる老コジモ（Cosimo il Vecchio）でなく、後に初代トスカーナ大公コジモ一世となった人）からピサの大学に招かれたが辞退している。[4]

カール五世の時代、ヴェサリウスの侍医としての業績では、患者の膿胸手術を行ったことが知られている。[5]

またヴェサリウスがカール五世の軍に従軍中のエピソードとして、カール五世がインスブルックからようやく脱出したとき、ヴェサリウスがこれに同行していたことがある。

カール五世の時代は、宗教改革の時代であった。宗教改革者マルチン・ルターが贖宥を批判する『九十五箇条の提題』を発表したのは、ヴェサリウスが生まれて三年後の一五一七年である。[17][21] カール五世はカトリックとプロテスタントの融和に努めたが成功せず、晩年はカトリックの側に立った。[21]

同盟軍（プロテスタント）と皇帝軍（カトリック）が戦ったシュマルカルデン戦争で大功を立てたザクセン公モーリッツは、戦後処理の中で皇帝に批判的になり、一五五一年十月と一五五二年五月、皇帝が滞在していたインスブルックを襲った。皇帝が「夜逃げするように」脱出したのは、後のときである。[21]

『ファブリカ第二版』は一五五五年に出版されるが、それを援護するためであろうか、同年カール五世は、キリスト教徒が解剖学に従事することの可否をサラマンカ大学神学部に諮問し、可との回答を得た。[8]

カール五世は、健康を害したこと（暴飲暴食のため痛風を病んでいたが、侍医たちの忠告を聞かなかった）、長く戦乱の中で苦労したストレスから、死去に先立って公的生活から引退し、修道院に隠棲した。その最初として、一五五五年十月、ネーデルラントの支配権をフェリペ二世に譲った。[21] このころ、カール五世はヴェサリウスに宮中伯の称号を授与している。[1][4]

宮中伯という称号は、時代により国によって異なった意味を持つようである。[29] 宮中伯は官職を意味するが（日本におけるヨーロッパ史の慣習では、官職の場合に伯と、貴族称号の場合に伯爵と、訳する）、カール五世の時代、宮廷画家ティツィア

ーノも宮中伯の称号を受けており[4]、貴族称号に近い意味を持ったのではないかと思われる。これらの点は、著者（泉）が宮中伯認可状のラテン語を部分的にしか理解できないので、詳細は明らかでない。ヴェサリウスの祖父エヴェラルトも騎士に列せられたが、宮中伯の称号は一家の中でヴェサリウスのみである。

七、アンリ二世の事故

カール五世の引退後、皇帝位は弟フェルディナントが、スペイン王位とネーデルラントの支配権は嗣子フェリペ二世が継いだ[21]。フェリペ二世の宮廷におけるヴェサリウスの業績では、フランス王アンリ二世の事故の際の診療（一五五九年）と、フェリペ二世の皇太子ドン・カルロスの治療（一五六二年）とが有名である。

カール五世はフランス王と長く対立していたが、フェリペ二世はフランス王と和解することを望み、その手段の一つとしてフランス王女と結婚することを図った。フェリペ二世は夫婦運が悪く、たびたび妻に死なれ、生涯に四回結婚している。フランス王女との結婚式にフェリペ二世は直接出席しなかったが、アルバ公を遣わして代理結婚を行った。アンリ二世の事故は、この結婚式の祝賀行事の一つとして行われた馬上試合の際に起こった。アンリ二世は、スコットランド貴族の一員と戦い、たまたま兜の頬当が上がっていたところから、その間に木製の槍が入り込み、槍が折れてその一部が右目の付近にささったのである[4]。

アンプロアーズ・パレがこの事故の治療にあたったことは有名で、フェリペ二世から治療を命じられたヴェサリウスも、パレの治療を追認するのみであった。むしろヴェサリウスの名声を高めたのは、アンリ二世の死後に解剖を行ってその病状を明らかにした報告によってである[4]。

この年一五五九年、ヴェサリウスはフェリペ二世に従い、ブリュッセルを去ってスペインに移った[4][5]。

八、ドン・カルロスの治療

ドン・カルロスはフェリペ二世の皇太子で、後にフェリペ二世から監禁されるなど、父子葛藤の主人公として知られる。[30][31]

ドン・カルロスの負傷の経過で多くの文献が一致しているのは、下級廷臣の娘と恋仲になり、逢引の場所へ行こうとして、あるいはそれから帰ろうとして、暗い階段を踏み外し、鍵が閉まっていた扉に頭を打ちつけて負傷したというものである。[4][5]

負傷の後、熱が出て下がらず、侍医たちが種々治療したが軽快しなかった。ヴェサリウスは、フェリペ二世に命じられて治療に赴き、眼窩を穿刺した。[4] 医史学の文献では、このヴェサリウスの治療によって症状が軽快したと書かれているものが多いが、ヴェサリウスの治療は、必ずしも評価されなかったようである。

フェリペ二世は、治療がはかばかしくないと病室に聖遺物を置かせた。[4] 治癒を祈って、鞭打ち行者の行列も行われたという。[4] ドン・カルロスが治癒したのは聖遺物のおかげ、という考えも強かったといわれる。

九、エルサレム巡礼

ヴェサリウスがエルサレム巡礼に出た経緯は、明らかでない。

カール五世は、スペイン王となったときにフランドル宮廷から多くの廷臣を連れて行って摩擦を起こした。一時は、フランドル出身でないものは低く見られるなどの状態にあった。スペインで起こった内乱、コムネロスの乱の原因をこれに求めている文献もある。[21]

しかしフェリペ二世はスペイン生まれ、スペイン育ちで、外国へ出た事も少なく、カール五世時代に小さくなって不

満をかこっていたスペイン系廷臣が、フェリペ二世の時代になって威張り始めたことは容易に想像される。ヴェサリウスは、一五五九年にブリュッセルからスペインへ移り、一五六四年にエルサレム巡礼に出ているが[4][5]、こうした宮廷の空気も一つの原因でなかったろうか。

ただしフェリペ二世のヴェサリウスに対する信頼は厚く、先に述べた二件の事故に対して派遣されていること、ヴェサリウスの死後、遺族に手厚く報いたことがその表れである[4]。

ヴェサリウスは、一五六四年十月、エルサレム巡礼の帰途、地中海の島で死去した[4]-[6]。

一〇、フェリペ二世と天正遣欧使節

フェリペ二世は、一五八四年十一月十四日、わが天正遣欧使節を引見しているが[32][33]、ヴェサリウスがスペイン宮廷を去り、死去した後で、天正遣欧使節はヴェサリウスに会っていない。双方の間にはちょうど二十年の間があり、遣欧使節実現の中心となったバリニャーノ巡察師はヴェサリウスと同じパドヴァ大学の出身だが、学位取得はヴェサリウスのちょうど二十年後（一五五七）である[33]。

一一、考　案

ヴェサリウスの医学史上の業績があまりにも偉大であるため、ヴェサリウスの一般史的背景は論じられることが少なかった。しかしヴェサリウスが侍医として仕えたカール五世は近世ヨーロッパ史の重要人物であり、またフェリペ二世はスペイン・ハプスブルクの最初の人として、スペイン史上、また当時のスペインの占める役割からヨーロッパ史上、重要な人物である。

ヴェサリウスの家系をたどってみると、ハプスブルク家およびその縁戚のブルゴーニュ公家と密接な関係にある。ハ

プスブルク家のヨーロッパ史における重要性は多言を要しないであろう。また神聖ローマ帝国、フランス王国、英国、スペイン等との関係、あるいは文化的影響をめぐって、ブルゴーニュ公国のヨーロッパ史における重要性は極めて大きい。ヴェサリウス自身あるいは先祖は、これらの関係によってヨーロッパ史の重大な局面に立ち会ったのである。

『ファブリカ』が生まれた背後に、印刷術の発展があったことがしばしば指摘される。この時代が美術史上重要な時期であったことも指摘したい。『ファブリカ』の画家は、一般にはフランドル出身のファン・カルカール（van Calcar）とされているが、[4] 坂井はこれを否定している。[6] ファン・カルカールはヴェネツィア派の巨匠ティツィアーノの弟子であり、美術史上の大きな流れの中の一人である。

中世風、ビザンチン風の平面的な画法から離れて、十五世紀に遠近法が発明され、ルネサンスの空気を背景に、人体も写実的に描かれるようになった。油絵の技法も、フランドルの画家ファン・エイク兄弟（弟ヤン・一三八九ごろ―一四四一）[34] によって完成された。ヴェサリウスとならんで、解剖学における貢献が指摘されるレオナルド・ダ・ヴィンチは、ヴェサリウスが生まれて五年後の一五一九年に死去している。[34] レオナルドは、芸用解剖学的観点から解剖学的観察に進んだが、その基礎には、このような美術史上の発展があった。皇帝マクシミリアン一世の肖像画の傑作を残したアルプレヒト・デュラーが、優れた銅板画画家であったことも思い出されよう。これらの発展は、十六世紀に出版された『ファブリカ』の図版（銅板画でなく木版画だったが）[7] のレベルに影響したと思われる。

ヴェサリウスは、フランドル地方の中心都市ブリュッセルに生まれ、生活した。フランドルは、毛織物生産と貿易によって高い経済成長を達成し、それを基盤に高度の文化と市民意識を得ていた。さらにそれを高めたのが、ブルゴーニュ公国の文化政策、特にフィリップ善良公のそれであった。こうした文化的レベルの高さと、ハプスブルク家・ネーデルラント・フランドルとの関係が、ヴェサリウスの業績に影響したといえるであろう。

坂井建雄から提起された「ヴェサリウスはなぜスペイン宮廷の侍医となる道を選んだのか」という疑問を考えてきた

間に、著者は、ヴェサリウスは、世襲職である廷臣一家の一人として、父の跡を継いだのではないかと考えるようになった。

当時、フランス王国は絶対王制へ進みつつあり、またブルゴーニュ公国は行政制度の整備に努めていた。このような近代国家への歩みはあったものの、実際の権力を持つのは各地の個々の領主であった。こうした領主は、権力集団として軍事・外交・行政・家政を担当するスタッフを抱えなければならず、一方でこうしたスタッフは権力に近い地位を守るために、その地位を代々受け継いだ。こうした地位は必ずしも専門職ではなく、複数の職務を担当した。宮廷画家や宮廷薬剤師も例外ではなく、ヴェサリウスの父アンドリエスの嫡出承認書とヴェサリウスの宮中伯認可状には、アンドリエスが「侍者にして薬剤師」（varlet de chambre et appoticaire）[3]（注八）、（cubiculis et pharmacis fuit）[1]と書かれている。

日時は特定できなかったが、ヴェサリウスの父アンドリエスは一五四三年に死去している。[4]ヴェサリウスがスペイン宮廷にはいったのは、一五四三年八月[5][6]あるいは一五四四年[10]とするものが多い。ヴェサリウスの家はいわばハプスブルク家の家子郎党で、ヴェサリウスは、父アンドリエスがハプスブルク家の廷臣として保っていた地位を、父の死後受け継いだのではないか。クレーフェ近郊でヴェサリウスがカール五世に会ったのは、いわばその「お目見え」の儀式だったのではないだろうか。

ヴェサリウスの宮中伯は、官職称号なので世襲できない。またヴェサリウスには男子の後継者がなく、廷臣としての地位を継がせることができなかった。[4]そうした限界はあったとしても、ヴェサリウスが宮中伯の称号を得たことは、廷臣一家の一人としても破格の待遇であり、カール五世のヴェサリウスに対する卓越した評価をしめすものであろう。

このように考えてくると、ヴェサリウスの医学史上の業績がどんなに偉大であっても、ヴェサリウスの人生針路では、パドヴァ大学における期間は廷臣としての準備期間ということになる。こうした想像が正しいかどうかは、今後の批判

に待ちたい。

謝　辞　種々ご教示をいただいた坂井建雄教授に深謝する。

（この論文の要旨は、平成十六年五月、第一〇六回日本医史学会総会で発表した）

注

（注一）ヴェサリウスの母は英国人であったといわれるので、[4] エリザベス・クラッブとすべきかもしれない。ただしオマリーはこの説を否定し、ブラバント出身としている。[5]

（注二）人の名前は、母語によって異なる。例を挙げると、初代ブルゴーニュ大公と結婚したフランドル伯領の継承者はマルグリート（母語：フランス語またはフランス語系のワロン語）、ブルゴーニュのマリーの継母でシャルル突進公の後妻は英国出身でマーガレット（母語：英語）、マクシミリアン一世のネーデルラント総督はマルガレーテ（母語：ドイツ語）で、ネーデルラントでは「アウストリアのマルガレータ」（南ネーデルラント語による表記？）と呼ばれた。

ネーデルラントあるいはフランドル地方は、言語的に非常に複雑な地域である。この地方は、ローマ帝国の時代からゲルマン系とケルト系、後にラテン系の住民とがおり、[13][35] そのため言語的にも二種、南ネーデルラント語（ゲルマン語派低地ドイツ語系（オランダ語系）、別名ヴランデレン語、いわゆるフラマン語）とフランス語（またはフランス語系のワロン語）に分かれて、[35] 「言語戦争」[36] など種々の葛藤を起こした。フランドル語という言葉は南ネーデルラント語と同義とされるが、[35] フランス語あるいはフランス語系のワロン語に使われている場合もあるようである。

ヴェサリウスの時代の文章用語がラテン語であるため、史料には多くラテン化した名前が書かれており、参照した文献では、人名がラテン語、英語、スペイン語等で表記されているため、原名を決定できなかった。

たとえばカール五世は、神聖ローマ皇帝としてはカール五世、スペイン王としてはカルロス一世と呼ばれるが、カール五世の母語はフランス語（またはフランス語系のワロン語）で、祖父シャルル突進公にならって名づけられたので、本来の名はシャルルである。[21] またラテン語では、Carolus と書かれている。[1]

ヴェサリウス自身のアンドレアス・ヴェサリウスという名前もラテン名であり、ヴェサリウスというのもWeselという先祖の出身地から来たラテン名で、[4] 本来の姓はWiting[5]あるいはWitincx[4]等（正書法が確立していないため、いろいろに表記された）であったといわれる。ファン・カルカールというのも、レオナルド・ダ・ヴィンチのダ・ヴィンチも、出身地名で姓ではない。一次史料を参照できなかったので、ヴェサリウス家の人名は、文中では通説に従って記載する。

（注三）バロンはヨハネスの署名を著書に掲載しているが、それを見るとヨハンと読める。[4] 本名はヨハンであったのかも知れない。ヨハネスは、ラテン名である。

（注四）現代ドイツのライン下流地方の地図[37]を見ると、次のような地名が見られる。この地方は、ドイツ国境がオランダに向って張り出している地域で、いわゆる低ライン地方、州名は北ライン・ウエストファーレン州である。

ライン河右岸には、ヴェーゼル（Wesel）がある。ヴェサリウス一家の出身地とされる地名で、Weselはデュイスブルクからオランダのアルンヘムへ向う鉄道の中間点にある。

ライン河左岸には、道路に沿い、ほぼヴェーゼルの対岸から下流に向って、クサンテン（Xanten）、カルカール（Kalkar）、クレーフェ（Kleve）の地名が見られる。Xantenはローマ軍団がライン防衛の基地としたところで、[38] ヴェサリウスと関係はないが、低ライン地方の代表的な地名として挙げた。前にのべたように、『ファブリカ』あるいは『解剖学図譜』の画家とされるファン・カルカールの名は出身地からきているが、Kalkarはその出身地であろう。バロンは、「CalcarはKalkarと書かれ、クレーフェ公領の小さな村で、ヴェーゼルから二五キロメートルのところにある」[4] としている。ファン・カルカールはフランドル人とされるが、ヴェサリウスと同じように、この地方から移住した一家と思われる。

KleveはCleveとも書かれた。ブランデンブルク選帝侯フリードリヒ・ウイルヘルム（大選帝侯）が発布したブランデンブルク医事勅令の冒頭に大選帝侯の領地を列記したところがあるが、そこではCleveと書かれている。[39] ヴェサリウスの時代には、ヴェーゼルはクレーフェ公領に属していたが、現在はKleveよりWeselの方が大きい。Kleveは、オランダのネイメーヘンに近い位置にある。

（注五）エヴェラルトが叙された騎士は、「金羊毛の騎士」であろうと思われる。金羊毛騎士団はブルゴーニュ公国三代目のフィリップ善良公によって創設され、後に騎士の任命権がハプスブルク家に移り、オーストリア・ハプスブルクとスペイン・ハプスブル

クが分かれた後は、両家が任命権を持った。[18][22] この騎士位は、英国のナイトなどより重い。

（注六）この『ファブリカ』扉絵下端の文章の訳については、異論がありうると思うので説明したい。原文は次の通りである（写真参照）。

“cum caesareae Maiest. Galliarum Regis, ac Senatus Veneti gratia et priuilegio, ut in diplomatis eorundem continetur.”

問題は、Galliarum Regis（ガリア王の）で、一般にはフランス王と訳するのが普通であろう。オマリーはそのように解している。[5] しかし著者は、次の理由から本文のように訳した。（1）ac の前にコンマがあること、つまり三者は併記でなく、コンマの前は同一人物を指すと考えた。（2）『ファブリカ』に掲載された「オポリヌスへの手紙」で、ヴェサリウスが、モンペリエの司教がヴェサリウスのためにフランス王から認可状を得ようとしたが失敗し、自分はこれ以上認可状を求める気はないと書いており、[28] これに関連してヴェサリウスがフランス王室と接触したという記録がないこと、（3）フランス王フランソワ一世はカール五世の宿敵で、とくに『ファブリカ』出版前年の一五四二年夏、カール五世に宣戦布告し、和平が成立したのは出版翌年であり、[21] 従って『ファブリカ』の出版された一五四三年六月は対立の最中で、この時期、カール五世への献本にフランス王の名が大きく書かれることは考えにくいこと、（4）カール五世の特許状はブリュッセルに置いてあり、母親からイタリアへ送ってもらった。[27] したがってこの特許状は、カール五世がフランドル伯あるいはブルゴーニュ公などの称号で下付したのかも知れないこと、（5）同じころの史料に、フェリペ二世を「ガリア・ベルギカの伯」と呼び、この地位がフィリップ美公からカール五世を経て受け継がれたとしているものがあること。[40] Regis の主格 rex は、普通、王と訳されるが、本来の意味は統治者であり、伯という称号と矛盾しない。

ヴェサリウスが承認して刊行されたという、『ファブリカ』のドイツ語訳では、「ガリア王の」という語句が省略されている。[4]

（この文章の解読に、医の博物館（新潟）の拡大展示が有益であった。記して深謝する）

（注七）クレーフェ公領は神聖ローマ帝国に属するが、その位置からフランスと関係が深く、クレーフェ公はしばしば皇帝に反抗した。江村洋は、「フランスとネーデルラント間の、長年にわたる紛争の震源地ともいうべきクレーフェ」と書いている。[21]

クレーフェは、フランス語ではクレーヴとなる。フランス最初の心理小説とされるラファイエット夫人の『クレーヴの奥方』（“La Princesse de Clèves”）に出てくるクレーヴ公は、クレーフェの領主と思われるが確認できなかった。ラファイエット夫人は十七世紀の人だが、この小説の舞台は十六世紀のフランス王アンリ二世の時代で、アンリ二世の事故の話も出ている。文中、次

の描写は、フェリペ二世に派遣されたヴェサリウスのことを言っているのではないだろうか。

「その頃、ブリュッセルにご滞在中のイスパニア王は、この出来事をお知りになると、名医の名も高い医師をおつかわしになりました。この医師の見立では、国王さまのお癒りになる見こみはないとのことでした（川村克己訳）[4]」

（注八）ヴェサリウスの父アンドリエスの嫡出承認書[3]はフランス語で書かれているが、古い時代のためか、フランドル地方のフランス語系言語ワロン語の影響か、綴り、単語、文体などが現代フランス語と多少異なっている。varlet de chambre は現在の valet de chambre（召使）で、また apoticaire は、フランス語の辞書には薬剤師の古語として apothicaire の綴りで出ている。

参考文献

（1）ヴェサリウス宮中伯認可状、文献（4）二七五―二八〇頁

（2）Andreas Vesarius: On the Fabric of the Human Body, Book I The Bones and Cartilage, (transl. by W. F. Richrdson), Norman Publishing, San Francisco, 1998

（3）父アンドリエスの嫡出承認書、文献（4）二八一―二八二頁

（4）José Baron Fernández: Andrés Vesalio, Su Vida y Obra（アンドレアス・ヴェサリウス、その生涯と業績）, Consejo Superior de Investigaciones Cientificas, Madrid, 1970

（5）チャールス・D・オマリー著、坂井建雄訳『ブリュッセルのアンドレアス・ヴェサリウス　1514―1564』、エルゼピア・サイエンス　ミクス、東京、二〇〇一

（6）坂井建雄『謎の解剖学者ヴェサリウス』、筑摩書房、東京、一九九九

（7）坂井建雄「解剖学の父ヴェサリウス、その十」『ミクロスコピア』一九巻三号、二三〇―二三五頁、二〇〇二

（8）小川政修『西洋医学史』、日新書院、東京、一九四四

（9）小川鼎三『医学の歴史』、中公新書、一七版、一九七四

（10）川喜田愛郎『近代医学の史的基盤（上）』、岩波書店、東京、一九七七

（11）Garrison, F.H.: An Introduction to the History of Medicine, 4th ed., W.B. Saunders, Philadelphia and London, 1929

（12）Catiglioni, A.（translated by E.B. Krumbhaar): A History of Medicine, 2nd ed., A.A. Knopf, New York, 1958

(13) 森田安一編『世界各国史14　スイス・ベネルクス史』、山川出版社、東京、一九九八
(14) 江村　洋『中世最後の騎士—皇帝マクシミリアン一世伝』、中央公論社、東京、一九八七
(15) ヴェサリウス「シナ根の書簡」（部分）、文献（5）より引用
(16) ジョセフ・カルメット著、田辺保訳『ブルゴーニュ公国の大公たち』、国書刊行会、東京、二〇〇〇
(17) 成瀬治ほか編『世界歴史大系　ドイツ史1』、山川出版社、東京、一九九七
(18) 林健太郎編『世界各国史3　ドイツ史』、山川出版社、東京、一九九二
(19) 菊池良生『神聖ローマ帝国』、講談社現代新書、二〇〇三
(20) ゲオルク・シュタットミュラー著、矢田俊隆解題・丹後杏一訳『ハプスブルク帝国史』、刀水書房、東京、一九九七
(21) 江村　洋『カール五世、中世ヨーロッパの最後の栄光』、東京書籍、東京、一九九二
(22) 堀越孝一『ブルゴーニュ家』、講談社現代新書、一九九六
(23) ホイジンガ著、堀越孝一訳『中世の秋』、中央公論社、東京、一九七一
(24) Church of Our Lady-Bruges, 20p, Verlag Thill S.A. Brussels, 2001
(25) 西川和子『狂女王ファナ』、彩流社、東京、二〇〇三
(26) ホセ・ルイス・オライソラ著、宮崎真紀訳『女王ファナ』、角川文庫、二〇〇四
(27) 『ファブリカ』序文、文献（2）xlvii—lviii 頁
(28) 「ヴェサリウスのポリヌスへの手紙」、文献（2）lix—lxii 頁
(29) "(count) palatine", The New Encyclopaedia Britanica, Vol. 9, 74-75p., Encyclopaedia Britanica, Inc., 1992
(30) ランケ著、祇園寺信彦訳『ドン・カルロス—史料批判と歴史叙述—』、創文社、東京、一九七五
(31) Schiller, F.: Don Carlos, Reklam,（出版年失記）、ヴェルディ、歌劇「ドン・カルロ」（上記シラーの戯曲による）
(32) 松田毅一『史譚天正遣欧使節』、講談社、東京、一九七七
(33) 若桑みどり『クアトロ・ラガッツイ』、春秋社、東京、二〇〇三
(34) 『岩波・ケンブリッジ世界人名辞典』、岩波書店、東京、一九九七

(35) 河崎　靖・クレインス　フレデリック『低地諸国（オランダ・ベルギー）の言語事情』、大学書林、二〇〇二
(36) 増田純男編『言語戦争』、大修館書店、東京、一九七八
(37) EURO MAP, Germany, West and East, Bartholomew・RV, 1990/1991
(38) 塩野七生『すべての道はローマに通ず、ローマ人の物語X』、二〇七、二六六頁、新潮社、東京、二〇〇一
(39) Winau, R.: Medizin in Berlin, 32s,.de Gruyter, Berlin・New York, 1987
(40) デ・サンデ『天正遣欧使節記』、文献（33）二九五頁より引用
(41) ラファイエット夫人著、川村克己訳、「クレーヴの奥方」、『集英社ギャラリー「世界の文学6、フランス1」』、一二二頁、集英社、東京、一九九〇

（介護老人保健施設　陽翠の里）

Andreas Vesalius in the Spanish Court

Hyonosuke IZUMI

After the publication of "Fabrica," Andreas Vesalius entered the Spanish court and became a court physician to Charles the Fifth, Holy Roman Emperor, and then to Philip the Second, Spanish king. The author studied this process and its historical background.

The ancestors of Vesalius had close relations with the Hapsburgs and the dukes of Burgundy, and served them as court physician or a court pharmacist. Vesalius was born in Brussels, obtained his degree at the University of Padua, Italy, became professor of anatomy and surgery there, and published "Tabulae Anatomicae Sex" and "Fabrica."

In the era of the Spanish court, the treatments of Henry the Second, French king, and of Don Carlos, Spanish crown prince, are famous among Vesalius's medical contributions. In the year of his resignation, Charles the Fifth conferred the title of count palatine on Vesalius.